草原の少女ローラ

『草原の大吹雪』　第十二話

制作　日本アニメーション株式会社

東　京　放　送

脚本　山崎巌

人　物　（第十二話　「草原の大吹雪」）

ローラ　6

○

チャールズ　38（父）

キャロライン　30（母）

メアリイ　8（姉）

キャリイ　2（妹）

○

フィッチ

エレン

○

ジャック
バニイ
パティ
ペット
水鳥
野ぶた
ー他

1

インガルス家・ローラ達の寝室（朝）

ベットで眠っているローラとメアリィに一明るい朝日がさし込んでいる。

傍で、キャロラインの声。

「メアリィ、ローラ、起きなさい！」

メアリィとローラ、慌てゝ半身起き上る。

その見た目で一立っているキャロラインが、キャリィに変る。

二人、目をパチクリ。

メアリィ「なんだ……キャリィじゃないの」

ローラ「おどかさないでよ」

キャリィ「（キャロラインの口マネ）……もうすぐ、ごはんでちゅよ」

メアリィ、大きくノビをしながら、窓を見る―積った雪が、朝日にキラキラ輝いている。

キャリィ「あ、吹雪かやんだ!」

ローラ「(のぞいて)わあ、ステキ!」

―遠くトントン、金づちの音がする。

ローラ「あっ父さんだ! そりを作ってくれてるんだわ!」

メアリィ「ほんと!」

ローラ「だって、ずっと頼んでたんだもん!」

2
全・居間

着がえたメアリィ、ローラが、とび降りてくる、続いてキャリィ。

食卓で、くんせいの肉を包んでいるキャロライン。

メアリィ「お早う、母さん」

ローラ「母さん、お早う」
キャロライン「お早う」
ローラ「ね？　父さん、馬小屋でしょう？……」
キャロライン「（微笑）あら？　よく知ってるのね……」
ローラとメアリィ、顔を見合わせて笑うとワラぐつをはき、フードつきのオーバーを掴んで戸口からとび出そうとする。
キャロライン「メアリィ、ローラ……朝起きたらちゃんと顔を洗って、口をゆすぎなさいって、母さんがいつも言ってるでしょ？」
ローラ、メアリィ「はーい（急ブレーキ）」
二人、急いで片隅の水をオケに入れると顔を洗い、口をゆすぐ。
キャリィ、二人の間に割り込むー
キャリィ「あたちも、あたちも！」

メアリィとローラ大急ぎで洗ってとび出していく。
キャロライン笑ってキャリィの顔をふいてやるとオーバーを着せる。

3 全・表

雪かきがしてある馬小屋へ通じる道をーローラとメアリィが、行く。
馬小屋の表で遊んでいたジャックが、尻尾を振って近づいて来る。

ローラ「お早う、ジャック、ジャック！」
ジャック、ほえる。

4 馬小屋の中

入って来たローラとメアリィ、嬉しそうに立止る。
金づちで、トントン……チャールズが、大きなソリをつくっている。
（図面は一巻一〇二頁を参考）

ローラ「わア、大きなソリ！」
チャールズ「約束だったからね、ちょっと早起きしてね……」
メアリィ「素敵!!」
チャールズ「……吹雪がやんでいたから、お前達をびっくりさせようと思ってたんだが見付ってしまったか……」
ローラ「三人、いち列に坐っても、一緒に乗れるわね」
チャールズ「うん、キャリィも乗せておやり」
メアリィ「ね、父さん……もう出来たの？……」
チャールズ「もう少しだ……」
チャールズ、釘を打ちつける。

5

全・家の表

キャリィが出て来て、馬小屋の方へチョロチョロ行く……が、立停る。

傍の雪の斜面に、羽根をバタバタさせている水鳥がいる。

キャリィ、目をパチクリ。

その水鳥の両脚は、雪の中に埋まった枯草にからまったらしく、もがいているのだ。

キャリィ「……どうちたの!?」

6

馬小屋の中

ソリの後部に、釘を打ちつけるチャールズ。

ーしゃがみ込んで見守るメアリィの傍でローラは待
ち切れず、坐り板を取上げるとソリの上に置く。

メアリィ「ローラったら」

ローラ「父さん、これでいいんでしょ？」

チャールズ、釘を打ちながら見て。

チャールズ「あゝそうだ」

ローラ「よオシ……」

ローラ、その板の上に釘を突き立てると、別の金づ
ちを取上げるーそして、トントン打つ。
だが、釘が途中で曲ってしまう。

メアリィ「あ、曲げちゃった」

ローラ「大丈夫よ」

ローラ、釘ぬきを取上げると、釘の頭に引っかけ、
足をふんばって、力一杯ぬこうとする。
後部で、釘を打ち終ったチャールズが立上る。

瞬間、ローラ、釘をぬくが、その反動でひっくり返りー両足でソリを蹴飛ばしてしまう。
と、回転したソリの前方が、ガツンとスキやクワに当り将棋倒し。
つながれていたバニイ達、驚いていななく。
呆れてみつめるチャールズとメアリィ、ローラ、しょんぼり。
チャールズ「ハハハッ、ローラにはソリ作りはまだ無理だな……待ってなさい、すぐだから……」
ローラ「はーい」
その時、表でジャックの吠え声。

7	全・表近く

雪の斜面をー腰の辺りまで埋まりながらキャリィが

もがいている水鳥に近づいて行く。
ジャックが水鳥の前で吠えている。
キャリィ「邪魔しちゃ駄目」
キャリィ、その鳥にやっと近づき、鳥の足もとの雪をかきわける。
キャリィ「かわいちように……」

8

馬小屋の中

チャールズ、ソリに最後の釘を打つと、ゆさぶってみる――しっかりしている。……
ローラ「わア、出来た！　出来た！」
メアリィ「父さん、丘の上まで運んでくれる？」
チャールズ「いゃ、父さん、これから町へ行かなくてはならないんだ」……

ローラ「え？　どうして？」

チャールズ「ずっと吹雪で、表へ出られなかっただろう……お正月の買物が沢山あるのさ」

メアリィ「……つまらないの」

チャールズ「朝ごはんが済んだら、キャリィと家の前で滑ってなさい、帰ったら丘の上に運んであげるから……」

その時、ジャックのまた吠える声。

9　表近く

キャリィが雪の下の枯草にからまった水鳥の足をはずして、水鳥を抱えあげる。

ジャック吠える。

キャリィ「ジャック！　シジュカニ、トリさんがコワガッテルデチョ……」

チャールズ、ローラ、メアリィが馬小屋から出て来て見る。

ローラ「あっ、キャリィが、鳥を摑えてる！」

メアリィ「まア！」

チャールズ近づいて、

チャールズ「冬鴨だな……キャリイ、どうしたんだい？」

キャリィ「アシか草にカランデタノ……タチュケテあげたのでちゆ……」

チャールズ「昨日の吹雪で仲間にはぐれたんだな……」

ローラ「一人ぼっちなの……」

チャールズ「うん、メアリィ、ローラ、よくお聞き、冬鴨はね、ほんとはどんなに寒い冬でも平気なんだけど、それでも吹雪が強いと、こうやって仲間にはぐれて、死んだりする事もあるんだよ……キャリィが見つけたから助かったけども……雪ってのはほんとは怖いものなんだよ……」

メアリィ「でも雪がふるとソリ遊びが出来るもの……楽しいわあ……」

チャールズ「それはソリ遊びは楽しいだろうけど……一人ぼっちで、雪の下の餌を探す冬鴨にとっては雪は怖い相手なのさ……」

ローラ「どうして……」

チャールズ「ローラだって、父さんや、母さんや、メアリィ達がいて、つまり仲間がいて、暖いお家があるから、吹雪の夜でも平気でいられるけど、一人ぼっちで、吹雪の中に抛り出されたら、大変だと思うだろう……」

ぢっと聞いてるローラ、大きく頷く。

母さんの声。

「みんな、ごはんですよ……」

母さん戸口に出てくる。

チャールズ「さあ、みんな、ごはんだごはんだ」

チャールズ、メアリィたちのお尻を叩いて家の方え。

チャールズ「じゃ、母さん、出掛けてくる……」
キャロライン「あら、ごはんは？」
チャールズ「雲が出て来た……また吹雪になるといけないからね
早く行って昼までに帰ろう」
キャロライン「じゃ、乾し肉でも」
チャールズ「フイッチさんの処で何か食べるよ」
ローラ「父さん、あたし棒あめ」
メアリィ「あたしは、ボンボン」
キャリィ「あたちも……あたちも」
チャールズ「はゝゝ、判った、判った」

10 雪の坂道

ペットが引く、チャールズのソリが行く。

11

雪の草原

その馬ぞりが行く。
ー粉雪が、舞い始める。
チャールズ、ペットを急がせる。

12

インガルス家・居間

せっせと食事をしているローラとメアリィ。キャロラインとキャリィは、ゆっくり食べている。
ローラ「ごちそうさま！」
ローラ、さっさと皿を持って片隅へ置く。
キャロライン「ローラ、今日は随分早いのね」
ローラ「だって、ソリで辷るんだもの」

メアリィ「ごちそうさま」

メアリィも、片隅へ行き、皿を置く。

ローラ、またコートを着る。

メアリィも、着る。

キャリィ、慌てゝ立上る。

キャロライン「キャリィ、食べかけでやめてはいけません」

キャリィ「姉たんたち、あたちおいて行く！」

キャロライン「大丈夫よ……ソリはお家の前へ持って来てくれる

わ……ねえ、メアリィとローラ」

ローラ「うん！」

ローラとメアリィ、飛出して行く。

キャリィ、突然、せっせと食べ始める。

キャロライン「キャリィったら……」

苦笑したキャロライン、窓に気がつく。

——粉雪が舞っている。

13

馬小屋の表

……

粉雪の中をーローラとメアリィが、ソリを引き出す。

家のドアが開いて、キャロラインが顔を出す。

キャロライン「二人とも、おやめなさい」

ローラ「平気よ、この位の雪だったら」

キャロライン「いいえ、父さんか云った様に、また吹雪になりそうだわ……お家の中へ入るのよ」

メアリィ「はい、母さん」

ローラ「（仕方なく）はーい」

14

クリーク沿いの道

チャールズの馬ぞりか行く。

――吹雪が、激しくなる。

15　町の通り

吹雪の中を――チャールズの馬ぞりが来るフイッチの店の前で、停まる。

16　フイッチの店

タナの品物の整理をしていたフイッチと、妻のエレンゼが振返る。

ドアが開いて、雪まみれのチャールズが入って来る。

フイッチ「チャールズさん」

チャールズ「……昼までは、何とか天気がもつと思ったんだが」

エレン「嫌ですねえ、やんだと思ったら、すぐ吹き降り……商売

になりませんよ」
チャールズ「はゝゝ、わたしが来たじゃないか……これを揃えて
　貰いたんだ」
　チャールズ、ポケットからメモを差出す。
エレン「（読んで）棒アメと……ボンボンと……」
　エレン、カウンターに、次々と菓子類を置く。
　吹雪が、窓に吹きつけ、ガタピシ鳴る。
フイッチ「チャールズさん……この雪じゃ、帰るのは無理ですよ
　……よかったら、一晩泊っていったら？」
チャールズ「いや、明日になれば晴れるとは限らないだろう」
フイッチ「しかし……」
チャールズ「それにもうすぐでお正月だ……子供達に、プレゼン
　トをしてやりたくてね」
　エレン、メモを見ながら、カウンターに更に菓子類
　や、子供のマフラー手袋、くつ下等を積む。

エレン「はい、これはおまけ……」

エレン、キャンデーの包みを差出す。

チャールズ「やア、有難う!」

17 インガルス家・表

ー吹雪が、更にひどくなる。

18 全・居間

窓からーメアリィと絵本を読んでいるローラ立って窓辺へ、そっと馬小屋の方を見る。

メアリィも立ってくる。

窓を透してー閉まった馬小屋の表に置いたソリが、すっかり雪に埋まっている。

ローラ「ソリが、とうとう埋まってしまったわ」

メアリィ「……父さん、切角つくってくれたのに」

ダンロの傍で、あみものをしているキャロラインの足許にうずくまっているジャック。

近くで、キャリィが人形遊びをしている。

ローラ「あーあ、どうしてこんなに、雪が降るのかしら！」

キャロライン「（苦笑）ローラ、お天気に八ッ当りしても仕様がないでしょ」

風にー窓が、ガタピシ鳴る。

キャロライン「それにしても、ひどい吹雪になりそうね」

メアリィ「母さん、父さん昼までに帰るって言ったのに遅いわねえ大丈夫かしら？」

キャロライン「父さんの事だから、帰れないと思ったら、フイッチさんの処へ泊めて頂くでしょう」

19

クリーク沿いの道

吹雪の中を—チャールズの馬ぞりが行く。

視界は全くさえぎられて、思う様に進めない。

必死に手綱を操るチャールズ

ペット首を深く下げて、ゆっくり進む。

……

20

雪の草原

雪嵐(ブリザード)の中を—チャールズの馬ぞりが行く。

激しい風にあほられて、ペットは左へよれかける。

チャールズ「ペット、まっすぐだ！　まっすぐ行け！」

ペット、雪と突風をまともに受けて立往生チャールズ、仕方なく手綱を逆の方へ向ける。

……

チャールズ「ペット……森へ行こう!」

向きをかえたペット、今度は流される様に逆の方へ歩き始める。

21

インガルス家・居間（夕景）

食事の支度をするキャロラインを手伝っているメアリィ。

キャリィは、寝そべっているジャックの傍で人形遊びをしている。

ひとり窓辺に立って、馬小屋の方を見ているローラ。

ー雪煙りで、なにも見えない。

ローラ、道の方を見る。

ー道も白く煙ってなにも見えない。

ローラ「（つぶやく）父さん大丈夫かしら……」

22

森の中（夕景）

ー舞い上る雪煙り。

チャールズの馬ぞりが来る。

と、ペットとソリを結んだ片方のロープが外れ、傾いたソリから、チャールズか転がる。いななく、ペット。

チャールズ、ソリにつかまって起き上るとロープをつなぎ合はせようとする。

その時、頭上でバリッと物音ー風で折れた太い木幹が落ちて来る。

気がついたチャールズ、ペットをかばって突嗟にさける。

その傍にバサッと落ちる太い木幹。

ペット、驚いて、いななきながら前肢立つ—その背にくくりつけた皮のサックと銃が落ちる。
慌てて手綱を摑もうとするチャールズ。
だが、ペットは恐怖の餘り、空のソリを引いたまま雪を蹴って走り出す。

チャールズ「ペット!!」

雪嵐が、忽ちペットの姿を消してしまう。

チャールズ「……ペット!」

遠くで、ペットのいななき声。
チャールズ、皮のサックと銃を拾って歩き出そうとするが—そこが傾斜になっているのか、突然、ズブッと半身が雪に埋まる。
チャールズ、這い出そうとする—か、更に激しい雪嵐に、身動き出来ない。
チャールズ、突然に、銃把でせっせと、雪に穴を掘

って行く。

23　インガルス家・全景（夜）

—屋根の上まで吹きあげる雪嵐（ブリザード）

24　全・居間（夜）

窓のスキ間から吹き込む雪を—布を詰め込み、防いでいるキャロラインとメアリィ。

ローラとキャリィは、濡れた床を拭いている。

メアリィ「母さん、父さん大丈夫かしら……」

キャロライン「きっとフイッチさんの店に泊ってるんですよ」

—と、眠っていたジャックが顔を起して低くうなる

その時、遠く馬のいななき。

メアリィ「あ、父さんが帰って来たわ!」
キャロライン「え!?」
ローラ、窓辺に走り寄って覗く。
雪煙の中に、近づくペットのシルエットがチラッと
見える。
ローラ「ホントよ、母さん!」
キャロライン、メアリィ、覗く。
ー近づき、いななくペットの姿。
ジャックほえる。
メアリィ「あ、ペットだけだわ!」
ローラ「父さんが居ない!」
キャリィ「どうちて? どうちて?!」
キャロライン、顔を強ばらせるとコートを着る。
ローラ「母さん!」
キャロライン「ペットを小屋に入れないと凍えてしまうわ」

キャロライン、ドアを開く—サアッと舞い込む吹雪。
キャロライン、ドアを閉めて出て行く。

25 仝・表

突風に吹き飛ばされそうになるキャロライン—必死に柱につかまる。
近づいて、いななくペット。
キャロライン、手綱を摑む。

26 仝・居間（夜）

窓から不安そうに見ているローラ、メアリィ達。
と、ローラがコートを着ながら裏口へ。
メアリィ「ローラ!!」

ローラ、裏口を開けて—

27 仝・納屋・表（夜）

—飛出す。
そこは家にさえぎられて、吹雪の力も弱まっている。
キャロライン、ペットを引いて来る。
ローラ、雪まみれになって納屋の戸を開く。
ローラ「母さん、早く!!」

28 仝・納屋の中（夜）

キャロライン、ペットを入れる。
続いて、ローラ。
おびえ、いななく、ペット。

ローラ「ペット……父さんはどうしたの!?」

バニイ、更にいななく。

キャロライン、ソリを結んだロープを見て蒼然となる。

ローラ「あ、ロープが切れてる!!」

キャロライン「ローラ!」

ローラ「父さん、家へ帰って来ようとしたのね……途中で、ペットと別れ別れになってしまったんだわ!」

キャロライン「……」

ローラ、飛出そうとする。

キャロライン「ローラ、どこへ行くの!?」

ローラ「あたし、父さん探して来る!」

キャロライン「お待ちなさい……こんな吹雪の中へ出たら、ローラが吹き飛ばされてしまうわ」

ローラ「だって、父さんにもしもの事があったら……あたし……あたし!」

キャロライン「……父さんは、きっと帰って来ます」……

ローラ「母さん！」……

29

雪穴の中（夜）

銃を抱え、革のサックを膝に一うずくまっているチャールズ。……

すざまじい風の音。

チャールズ、寒さにガタガタ震える。……

と、一革のサックを開いて、ローラ達に買ったマフラーを出す。クビに巻きつける。小さな毛糸の靴下を手袋の上からかぶせる。

30

インガルス家・居間（夜）……

食事の後片附をしているキャロライン。

眠っているキャリィを膝に一窓辺にじっと坐っているメアリィ表を見つめている。並んだローラも表を見ている一何も見えない。

ローラ「（つぶやく）父さん、あたし達、ソリも、お菓子もいらないわ……お願い、早く帰って来て」

31	草原の大吹雪
	ローラの声が反響する「父さーん！……帰って来て！　お願い！」
32	雪穴の中（夜）
	眠りかけたチャールズ、ハッと目ざめる。 一寒さに震える。

躰をこする……が直らない。
チャールズ、考えるが、ザックを開けてアメを取り出す……ためらうが、食べ始める。

33 インガルス家・ローラ達の部屋（夜）

ベットに寝ているローラとメアリィ。
だかローラは眠れない……そっと起き上ると、窓から覗く。
渦巻く吹雪に、何も見えない。
ローラ内面の声「……父さん……どこにいるの!? 早く帰って来て!!」
傍に、メアリィが立つ。
ローラ「姉さん!」
窓の外を見守るメアリィ……その頬に涙が伝って。

ローラ「（元気ずける）大丈夫よ、父さんきっと戻って来るわ！」

34

全・居間（夜）

椅子に坐り、じっと待っているキャロライン。……ただ待つ……ひたすら待つ傍に寝そべっているジャック。

35

インガルス家・全景（夜）

ー雪嵐が、吹き荒れる。

36

雪穴の中

またコックリをするチャールズ……その顔が、抱え

ていた銃身に当ってハッと我に返る。その足許に、食べ散らかしたアメの包み、チャールズ、耳を澄ます。

―風の音は、納まっている。

チャールズ、銃身で雪を掘り出す……必死に掘り続ける。

やかて、バサッと雪が崩れる。

チャールズの目前に拡かったのは……吹雪かやみ、朝日に輝く、森の風景である。

―雪穴から這い出したチャールズ、歓喜に溢れた顔で、大きく一つノビをする。

37 インガルス家・ローラ達の寝室

キャリイを抱いて入って来た、キャロライン立尽す。

毛布にくるまり、窓辺に寄りかかる様に眠っている
ローラとメアリィ。
ー窓を覗きながら、そのまま眠ってしまったのだ。
キャロライン「メアリィ……ローラ」
二人、目覚める。
メアリィ「あ、母さん！」
ローラ「ね、父さん、帰って来た!?」
キャロライン「まだですけど、雪もやんだから、もうすぐ帰って
来ますよ……」

38 全・下の部屋

着替えた、ローラとメアリィ、母さん降りてくる。
ローラ窓辺にいって見る。
その時ー遠い雪の稜線に男のシルエットが現れる。

ローラ「あ！　父さんだわ!!」
メアリィ「（窓に走り寄って）母さん、父さんが!!」
キャロライン身を翻えす。

39

全・表

とび出してくる四人とジャック立ちつくす。
髪の毛や、袖に氷の滴をしたたらせて、一歩、一歩家に近づく父さん。
ローラも、メアリィも、母さんも、キャリィも、言葉もなく立ちつくしていたが突然四人走り出す、追うジャック。
近づく、父さんの顔に、大きな笑いが、父さんもよろける様に走り出す、父さんにとびつくローラ、メアリィ、キャリィ。

ローラ「父さん！」
メアリィ「父さん！」
キャリィ「父ちゃん！」
父さんの前に立つキャロラインの頬を泪が伝う。
父さん「メアリィ、ローラ、キャリィ！」
父さん、ローラ達にもみくちゃにされる。
ジャック吠え乍らぐるぐる廻っている。
－O・L－

40 全・家の中

暖ろの前に毛布にくるまった父さん。
あかあかと燃える火、メアリィとローラ父さんの足や腕をまさつする。
キャリィ、ふうふう言って大きな木を暖炉にくべる。

火がはじける。
熱いコーヒーを持ってくる母さん。

41

父さんうまそうに飲む

ー０・Ｌー

暖っかそうなオーバーを着てふくれた父さん、テーブルについて、食事をしている。
テーブルを囲んで、メアリィ、ローラ、キャリィ、父さんの食事を見守っている。
父さんがスープをのみ終って、ほっと息をついたところへ待ちかねた様にローラ乗り出して。

ローラ「ねえ、父さん！」
父さん「……まず、父さんに先に一言、ペットは帰って来たかね……」

キャロライン「ええ、馬小屋にちゃんといますわ……」
父さん「……それはよかった……さて、父さんがどこに居たかを
　　聞きたいんだろ？」
　　ローラたち、片唾をのんで頷く。
チャールズ「……森でペットとはぐれちまってね……雪穴に込もっていたのさ」
キャロライン「よかったわ……メアリィやローラも心配して、殆ど眠らなかったんです」
チャールズ「はゝ……わしは、そんなかんたんに参りはしないさ……ただね、一つだけ、メアリィとローラとキャリィに謝らなければならない事があるんだ……」
ローラ「何に？」
チャールズ「ローラの棒アメと、メアリィとキャリィのボンボンを父さんみんな喰べてしまったんだ……」
　　ローラたちぽかんと見る。

チャールズ「朝ごはんを食べて行かなかったし……家へ早く帰ろうと思ってフイッチさんの処でも、何も食べなかったんだ」

ローラ「じゃ、雪穴の中で!?」

チャールズ「うん……ずっとアメを食べていたのさ」

キャロライン「父さん……」

チャールズ「無事だったのは（ポケットから、マフラーを出して）お前達に買ったマフラーと（のびた靴下を出して）この靴下……あれ随分のびてしまったな……」

ローラ「いいの、父さん……父さんが助かったんですもの!」

メアリィ「そうよ……お正月のプレゼントなんて何もいらない!」

チャールズ「メアリィ……ローラ!」

ローラ「姉さん、プレゼントはあるわ!」

メアリィ「え!?」

44

雪の坂道

×　×　×

坂の上で見守っていた、チャールズ、驚く。

×　×　×

家の表で、見守っていた、キャロラインも。

滑走して来たソリが―その野豚をすくいあげる。

×　×　×

ソリの中で、驚くローラ達。

45

インガルス家・近く

雪煙りをあげて、ソリが停まる。

飛び降りた野豚が、逃げる。

その後を、ほえながら追って行くジャック、ローラ達、笑う。

× × ×

見降ろしていたチャールズも笑う。

× × ×

そしてキャロラインも……

× × ×

―O・L―

丘の上にソリをうんうん押しあげるローラ達。

―O・L―

滑るローラたち。

―O・L―

滑るローラたち。

× × ×

家の前で肩を寄せ合って見守っている父さんと、母さん。

（終）

草原の少女ローラ ⑫